

令和元年6月9日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03136

研究課題名(和文) ハルビンのロシア・ドイツ人難民 マイノリティの生活と再移住

研究課題名(英文) Russian German Refugees in Harbin---Their Life and Reemigration as a Minority

研究代表者

鈴木 健夫 (Suzuki, Takeo)

早稲田大学・政治経済学術院・名誉教授

研究者番号：30063746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀末以降にロシアに大量に移住したドイツ人移民は帝政末期のロシア化政策、第一次世界大戦、社会主義革命、内戦、飢饉のなかで多くの人びとが国外に移住したが、その後、農業集団化・反宗教政策に抗してかなりの数が西回りで南北アメリカに、また不法に国境を越えてハルビンに逃げた。本研究は、そうしたハルビンのロシアドイツ人難民の前史とハルビンでの状況および彼らの南北アメリカへの再移住について調査し、その成果は、第一次世界大戦、内戦、中国東北部、南米への再移住、アメリカ移住に関連した論文等を通して公表、2019年秋にはロシアドイツ人の歴史に関する単著『ヴォルガに鳴り響く弔鐘』(亜紀書房)を出版する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア帝国・ソ連において少数民族(マイノリティ)であったドイツ人移民は、圧制、世界大戦、内戦、大飢饉・飢餓という国内外の政治的・経済的・行政的な歴史的激動のなかで、移動を強いられ、苛酷な運命に遭遇した。本研究で解明した「ハルビン難民」の前史、ハルビンでの状況および彼らの南北アメリカへの再移住の歴史は彼らの苛酷な歴史を象徴的に表象している。今日の世界では難民問題は各国の政治経済の、そして国際世界の動向を左右する最重要問題となっており、ロシアドイツ人の「ハルビン難民」の歴史的経験は、「難民」にたいしてどのように対応すべきか等々の現代的課題にたいして、貴重な歴史的メッセージを発している。

研究成果の概要(英文)：Russian Germans who immigrated to Russia at and after the end of eighteenth century emigrated further to the north and south Americas in the policy of Russification, the WWI, the socialistic Revolution, a civil war and famines-hungries in the second half of nineteenth century and the beginning of twentieth century. And, after that, against the collectivization and the antireligious policy many of them moved to these Americas through Germany or through Harbin to which they had moved illegally.

In this study I investigated about the prehistory of "Harbin refugees", their life in Harbin and their reemigration to the North and the South Americas, and the result of these studies were published in the articles with related to the WWI, the civil war, the Northeastern China, the reemigration to South America, the emigration to United States, and in the autumn of 2019 I will publish the book about the history of Russian Germans "Funeral Bells resounded in the Volga"(the Akishobo).

研究分野：ロシア史

キーワード：難民 ロシアドイツ人 ハルビン マイノリティ 移住

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ロシア・ドイツ人の歴史は長い間ロシア・ソ連史のなかに埋没しており、研究対象としてタブー視されてきたが、ペレストロイカ、ソ連崩壊後にそのタブーが解かれ、またロシア・ドイツ人自身の祖国ドイツへの大量帰還(総数 250 万人以上)などを通して歴史の表舞台に登場し、その研究も徐々に活発化してきている。しかしながら、本格的な学術研究は、18 世紀末のロシア入植、第一次世界大戦、ソ連時代のヴォルガ・ドイツ人自治ソヴィエト社会主義共和国、カザフスタン・シベリアへの強制移住(1941 年)、1990 年代以後のドイツ帰還といったいくつかの対象に集まっており、ロシア・ドイツ人の苦境からの国外脱出という歴史の研究は始まったばかりである。スターリン時代のロシア・ドイツ人の中国への逃亡とそこでの一時的な生活そしてその後の南北アメリカへの再移住については、個々の体験的報告などはあるものの、総合的な研究は多くなく、しかも現象の本質的理解に必要な社会史的検討は不十分である。

2. 研究の目的

18 世紀末以降にヴォルガ地方や南ロシアに大量に入植したドイツ人(ルター派、メンノ派、カトリック、19 世紀末に約 180 万人)は帝政末期のロシア化政策、第一次世界大戦、社会主義革命、内戦、飢饉のなかで多くの人びとが自らの信仰と生活を守るべくドイツや南北アメリカへと脱出し、1920 年代末からのスターリン時代にも農業集団化・反宗教政策を忌避し、かなりの数が、しかし生命を賭して不法に国境を越えハルビンに逃げてきた。彼ら「ハルビン難民」はその後南北アメリカに再移住していくが、本研究は、こうしたロシア・ドイツ人の「ハルビン難民」のハルビン移住前のロシアでの生活、ハルビンでの生活、南アメリカ(ブラジル、パラグアイ)への再移住(二千人程度)とそこでの生活について、その具体的現実を社会史的に解明し、マイノリティ難民の経験から現代への歴史的メッセージを考究する。

3. 研究の方法

ロシア・ドイツ人の「ハルビン難民」のハルビン移住前のロシアでの社会経済生活、ハルビンでの社会経済生活、そしてパラグアイ・ブラジルへの再移住とそこでの入植生活について、収集する資料(ハルビン難民体験者の報告、ルター派・メンノ派教会の国際的な往復書簡・報告書等々)およびパラグアイとドイツ・フランスでの文書館での収集資料(フランス経由の持名もアメリカへの再移住およびパラグアイ入植に関連する報告、新聞・雑誌記事等々)を分析する。

4. 研究成果

ロシア・ドイツ人の「ハルビン難民」の歴史について、ハルビン移住前の 20 世紀初めの社会経済生活、ハルビンでの状況および彼らの南北アメリカへの再移住について調査した。そしてその研究により、第一次世界大戦期におけるロシア・ドイツ人の状況、内戦期のロシア・ドイツ人の状況、中国東北部における難民の状況、南米へのロシア・ドイツ人の再移住の具体的な経緯、ロシア・ドイツ人のアメリカ移住に関連した諸問題について、単独日本語論文・翻訳論文・学会報告によって成果を公表した。なお、2019 年秋には以上の成果をも含め、ロシア・ドイツ人の歴史に関する単著『ヴォルガに鳴り響く吊鐘』(亜紀書房)を出版する。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件 うち翻訳論文 2 件)

- (1) 鈴木健夫「マフノ軍・赤軍に立ち向かうドイツ人移民ー「ハルビン難民」の 10 年前」
セーヴェル、査読有、No.34、2018、pp.34-55

ロシア革命直後の内戦時にマフノ軍と赤軍の襲来・略奪・凌辱・殺害の被害を受けた南ロシアのドイツ人移民(メンノ派、ルター派)について、彼らの自衛団の戦いと敗北を、そしてそこにおける問題性を解明した。

- (2) 鈴木健夫「流浪の民ロシアドイツ人」ユーラシア研究、査読無し、No.57、2018、pp.36-40、
ロシア・ドイツ人の「ハルビン難民」の歴史をも含む、ロシア・ドイツ人の歴史を紹介した。

- (3) 鈴木健夫「アメリカ合衆国に移住したヴォルガ・ドイツ人 コロラド州サウスプラット川流域の甜菜栽培」プロジェクト研究(早稲田大学)、査読有、No.12、2017、pp.53-69

19世紀末以降にロシアから直接に、あるいは本研究の対象とするハルビンや南アメリカ経由で移住したアメリカ合衆国のロシア・ドイツ人の歴史について、とくにコロラド州における甜菜栽培と児童教育の実態と問題性について解明した。

- (4) 鈴木健夫「第一次世界大戦とロシア・ドイツ人ー忠誠・従軍・捕虜・土地利用・強制移住」ロシア史研究、査読無し、No.98、2016、pp.30-41

第一次世界大戦時にロシア・ドイツ人が置かれた環境、すなわちロシアへの忠誠の強制と物質的貢献、ロシア軍への従軍、ドイツでの捕虜、ロシア西部における土地没収と東方への強制移住について解明した。

- (5) (翻訳論文)J. チャイエフスキ・イエジィ著/鈴木健夫訳「中国東北部におけるポーランド人(1897-1949)」セーヴェル、査読有、No.33、2017、pp.146-169

20世紀前半の中国東北部におけるポーランド人移民の活動を紹介した。

- (6) (翻訳論文)チャイエフスキ・イエジィ著/鈴木健夫訳「ハルビンのドイツ人」セーヴェル、査読有、No.32、2016、pp.176-192

20世紀前半のハルビンにおけるドイツ人移民の活動を紹介した。

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 鈴木健夫「『移動を強いられた』ドイツ人移民の歴史」西洋経済史研究会(早稲田大学)、2018年1月6日

18世紀末以降に戦乱のドイツからロシアに入植し、19世紀後半のロシア化政策、第一次世界大戦、ロシア革命、内戦、スターリンの圧制、第二次世界大戦、ソ連邦崩壊という激動のなかで、ロシア・ドイツ人は、苦境からの移住だけでなく、強制移住をも何度も経験したが、そうした彼らの「強いられた移住」を歴史的に解明した。

- (2) 鈴木健夫「ハルビン難民の南米移住 1932、34年 マルセイユ到着、ルアーヴル、ポルドーから出港」西洋経済史研究会(早稲田大学)、2018年1月7日

1932年と1934年にハルビンからマルセイユを経由し、ルアーヴル、ポルドーから出港してパラグアイとブラジルに向かったロシア・ドイツ人の「ハルビン難民」について、フランスの文書館で収集した当時の新聞記事に依拠して、その具体的状況を解明した。

- (3) 鈴木健夫「スターリン体制を逃れるメンノ派教徒 南ロシアからシベリア、ハルビン、そしてパラグアイへ」西洋経済史研究会(早稲田大学)、2017年1月7日

スターリン時代の1920年代後半 1930年代初頭に農業集団化と反宗教政策を忌避して南ロシアやヴォルガ地方からシベリアへ、そして不法に国境を越えてハルビンに逃げてきたロシア・ドイツ人のうちのメンノ派教徒、そして彼らのパラグアイへの再移住について、その具体的状況について紹介した。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。